

中川農園の主な農産物の生産販売暦



注: ■ 生産販売期間 ■ 栽培期間(非売品)



## 管内農家の経営実態

【シリーズ⑫】

### 中川農園 中川 和義さん

(安佐北区白木町)

case 12

#### [中川農園] 経営データ

- エリア  
中山間地域
- 経営規模
  - ・ハウス 600a (130棟)
  - ・露地野菜 20a
  - ・水稲 380a
  - ※ハウスを含む借地 800a
- 生産物  
青ネギ・シュンギク・ミズナなど  
非売品(水稲・ブドウ・イチゴ・トウモロコシなど)
- 労働力  
本人・パートを含む従業員22名  
(内外国人9名)
- 出荷販売  
市場・契約

J A 広島市管内は、南は広島市南区の似島から北は北広島町芸北まで、日本列島の縮図のように温暖な地域から寒冷地までが存在するため、管内農家の経営状況は多種多様となっても不思議ではありません。そこでこのシリーズでは、新規就農者や中核的な担い手農家の参考となるよう、管内の農業経営を分類・整理し、さまざまな営農環境のなかで工夫を凝らしながらがんばっておられる農家を紹介してきました。シリーズ⑫で最後となる今回は、中山間地域で大規模経営を営み、ネギやシュンギク、ミズナなどを市場出荷で販売する「中川農園」をご紹介します。

### 中川農園 経営の特徴

中川農園は、広島市の中心部から北東に位置する安佐北区白木町で、借地を主体としたハウス軟弱葉物野菜の経営を営んでいます。白木町は、広島市内では最も早くから圃場整備事業を実施した地域で、今では広島市の一大野菜産地を形成しています。中川さんは、就農当初から大規模経営を目指し、昭和49年に果菜類の露地栽培からスタートし、その後、ハウス青ネギ栽培に移行しました。当時、広島市の青ネギ栽培は、西区の観音と安佐北区の可部で主に行われていましたが、両地区とも移

気候と土地条件が大きく異なることから根本的な見直しを余儀なくされ、両国の農業の長所を活かしながら試行錯誤を繰り返して新たなスタイルを作り上げました。基幹作物の青ネギは、ハウスで直播栽培を行うため圃場回転率は非常に悪いですが、天候に左右されない栽培管理や出荷管理が可能となり、収穫と出荷調整作業に集中して労力を投入することができます。また、中川さんが考案したベルトコンベアー方式のネギ出荷調整システムは、素人から高齢者の人でも簡単に作業に従事できます。これまでは生産性を高めるためには経験者や熟練者の育成・確保が必要でしたが、システム化したことで大きく改善されました。農業を「業」として行う場合、個人主体の家族経営やパート雇用経営と従業員を雇用する法人や会社経営とでは、基本的に経営管理が大きく異なります。中川農園は、法人や会社組織にしていませんが、規模拡大をする場合は単に人員を増やすだけでなく、かならず栽培管理の合理化を図ります。規模拡大をする前後で作業方法や管理方法が同じならば、人件費が膨らむことで規模拡大した効果が薄れることになり、全体の経営からみる



中川 和義さん

植による露地栽培が主体でした。現在のように大規模経営となった背景には、中川さんが若い頃にプラジルの大規模農園で働いていた経験を活かし、優れた経営感覚、作業の機械化、計画的な栽培と人の雇用など、数多くの要因が積み重なって成り立っています。農業を「業」として確立するため、既存の栽培方法や作業管理の見直しを図り、高齢化などで地元雇用が厳しくなると外国人の就労をいち早く導入するなど、経営の観点からいろいろな行動を早めに取り組みました。また、積極的に研修生を受け入れ、実際の農作業を通して農業経営や

### 経営の詳細

中川さんは、プラジルから帰国した当時、日本でも同じような農業を展開することを考えていましたが、

と売り上げが伸びても収益の増加にはなりにくい場合が多くあります。農作物は、毎年販売価格が上昇するとは限りませんが、人件費は一般的に年数や年齢を重ねることで上昇することを中川さんは認識しています。

### 農業への覚悟と心構え

中川さんは、農業は自然相手の仕事であることから就農するにあたっては、①根気があること、②時間を自由な発想で活用すること、③種をまいて発芽し作物が生育した時に喜びが感じられること、などが重要な要件だと言います。また、農産物は工業製品のように常に同じ物が出来るわけではなく、価格も生産原価が反映しにくいなど、品質や生産量、収益などの確保が不安定要素として絶えず存在することから、長期的な視野で農業経営を考えていく必要があると考えています。

現在、中川農園が直面する大きな問題は、将来的に経営管理をどのようにするかです。中川さんは、健康に自信があった今まではほとんど気にしなかった後継者の問題を、最近は少し考えるようになり、栽培状況や経営管理のデータをパソコン入力するようにしています。

しかし、最終的に130棟のハウスを直接見て判断し調整するのは管理者であり経営者である「人」なのです。また、中川農園では、イチゴやブドウ、トウモロコシなどの農作物を遊び心で趣味として栽培し、施設の子供たちや近隣の住民、さらには白木地区の小学校の給食用に寄付するなど、農業を通して地域とのつながりを強めています。就農当時の夢として、①皆で楽しめる風呂を造る。②皆で一緒に海外旅行。③皆で味わえる売り物でない米や野菜、果物を作る。④研修生を育てて自立させる。などは達成しましたが、今でも達成できていないものが一つあります。それは、「中川農園関係者の誰かが自分の販売額や生産量を超えるようになる」ことです。この夢は、後継者問題と同じく時間が掛かりそうです。最近ではマスクミなどで農業が脚光を浴びていますが、農業経営や地域活動、社会活動など多く実績を残している中川さんが、「中途半端な事だけはやめてほしい。やるからには物事をよく見極め、自ら率先して動くことで人や物、さらにはお金までが付いてくる。だから農業には夢があり楽しみがあるんだよ」と自信を持って言います。